

都道府県別賞一等

優しい保険

香川県 高松市立桜町中学校 三学年

下原 悠愛

「また左手の指にヒビが入っています。」「
かかりつけ医の先生から言われた。」

私は落胆した。左手の薬指にヒビが入るのはこれで二度目だ。

私は部活動で新体操をしている。新体操の美しく華やかな姿に憧れて中学から始めたのだが、華やかさの裏にある練習は、他のスポーツにも引けを取らない程ハードだった。

母が私名義で加入してくれている医療保険は、入院や手術はもちろん、ケガでの通院にも保障がついているらしい。母が言うには、私がケガをしても通院医療費の負担は少ないそうだ。

しかし、通院のための交通費や思わぬ雑費にお金がかかるようだ。前回、部活動でジャンプの着地に失敗し、捻挫をしてしまった時は「着地に癖があるから、また捻挫をしてしまう可能性がある。ケガ予防のために、毎日テーピングとサポーターを巻くように。」と指導された。病院で購入したサポーターは何度も使えたが、テーピングは使い捨てのため毎回お金がかかる。こんな時に保険が役に立つ。

先月、私は歩道がない片側一車線の道路を自転車で行っていた。水たまりにタイヤが滑り、車道側に転倒した。一瞬のことだった。体が浮いた気がした。あっ、自転車が飛んだ。そう思った瞬間、身体に痛みが走った。後ろから来た車が右へと私を大きく避けた。危うく接触するところだった。死を感じる程の恐怖を味わった。どうやって自宅に帰ったのかも覚えていないが、無事だったことにほっとした時には体の震えと涙がとまらなかった。幸い、ケガはたいしたことではなく、手足の挫傷と肩の打撲ですんだ。しかし、しばらくは身体の傷以上に心に傷を負った。今でも事故現場付近を通ることができず、自転車に乗ることもできない。

私はまだ子どものため、治療費や治療に関するお金の心配をしなくてもいい。しかし、私が大人で、この間の転倒事故のように恐怖を味わった後、身体と心に痛みを感じる中、お金の心配をしなければならなかったとしたら、どうしようもない不安に陥るだろう。

昨年祖父が病気で入院・手術をした。私の通院とは違い、入院日数も長くお金の負担が大きかったようだ。差額ベッド代やレンタルの入院セット代など

第60回中学生作文コンクール

細々とした出費もあったので、やはり給付金はとても助かったようだ。

病気になると、きつと私が想像できないような心配事がたくさんあるのだろう。そんな時、保険に加入していることで、少なくともお金の心配をせず治療に専念できることは、この上なく安心なことなのだろうなとしみじみ感じた。

祖父は若い頃から何十年も生命保険に加入している。今までは、有難いことに保険金のお世話になることはなかったそうだ。しかし、歳をとった今、「相互扶助」の精神である生命保険に助けてもらう側になったようだ。祖父が支払った保険料も、かつては見知らぬ誰かの役に立っていたのだろうか。

保険はお守りだとよく聞く。もちろん、使わないで家族全員が健康でいられることが一番幸せだと思う。しかし、万が一の時のために、そして、自分や家族の身に何事もなければ、見知らぬ誰かを助けられるようにと生命保険は存在するのだ。このようなシステムを考えた人はすごいなと思った。保険が優しいのはシステムを考えた人が優しいからに違いないと思った。

未来のことは誰にも分からない。

いざという時に安心して生きるために、私も大人になったら、自ら選んだ生命保険に加入したいと思う。